

岩手県の生活綴方的教育方法の研究（その1） ——高橋六介の実践を中心に——

豊 田 ひさき¹⁾

The Pedagogy of “Seikatu-Tszuzurikata” in Iwate Prefecture (Part 1) With the Practice of Rokusuke Takahashi

TOYODA Hisaki

要 約

岩手県の青年教師高橋六介は、新任として赴任した黒沢尻尋常高等小学校に於いて、生活綴方教育を1927-30年に実践していた。これは、ちょうど小砂丘忠義等の『綴方生活』が創刊された時期と重なり、一般に「北方性」教育運動が本格化する1934-5年よりも早い。「北方性」の内実が必ずしも十全に満たされていたわけではないが、岩手県に於ける北方性生活綴方的教育方法の萌芽的实践であることが確認できた。

キーワード：生活綴方 「北方性」 高橋六介 岩手県

はじめに

本稿では、岩手県に於ける生活綴方的教育方法の検討を行う。筆者はこれまで、宮城県の宮崎典男、菊池譲、鈴木道太等の北方性生活綴方的教育方法を研究してきた。今回は、対象を岩手県に移し、先ずその手始めとして高橋六介の実践を検討する。

本研究の課題は、高橋の実践が、北方性生活綴方に影響を与えた小砂丘忠義等の『綴方生活』の「宣言」とどれだけ重なっているかということ突き止める作業を介して、彼が、北方性生活綴方教育の嚆矢の一人であったことを立証する。嚆矢とする根拠は、『岩手の教育界—岩手の校長会年史—』に「この北方性の教育運動の以前から黒沢尻小学校で『人生科としての生活綴方経営』を展開していた高橋六介の教育業績も、決して忘れてはならない」（下線—引用者）との記述にある¹⁾。第二の課題は、先の作業を通して間接的に「北方性」のメルクマールの一端を

も明らかにすることである。

より具体的に言えば、1930（昭和5）年10月号の『綴方生活』の次の「宣言」。これがなされたのは、30年9月。高橋の実践がこれと重なっていることが実証できれば、彼が北方性生活綴方教育のフロンティアの一人、と位置づけられるからである。

生活教育の叫ばるるや久しい。されど現実の教育にあって、これこそ生活教育の新拓野であると公言すべき一つの場面を発見し得るであろうか。／何時も教育界は掛声だ。そこには一つの現実をリードすべき原則なく、一人の現実を生き切るべき実力者がいないに見える。／教育は無力であるか。（中略）真実に生活教育の原則を握り、その実現力としての技術を練るの道、これこそ若き日本教育家のなすべき仕事の仕事であらねばならぬ。／社会の生きた問題、子供達の日々の生活事実、それをじっと観察して、生活に生きて働く原則を我も掴み、子供達にも掴ませる。本当な自治生活の樹立、それこそ生

1) 中部大学現代教育学部児童教育学科

活教育の理想であり又方法である。／吾々同人は、綴方が生活教育の中心教科であることを信じ、共感の士と共に綴方教育を中心として、生活教育の原則とその方法を創造せんと意企する者である²⁾。

1. 黒沢尻尋常高等小学校の教育

高橋が『人生科としての綴方経営の展開』を出版するまでの略歴は、1925（大正14）年に旧制盛岡一中卒。1928（昭和3）年岩手師範学校第2部卒業、直ちに黒沢尻尋常高等小学校（現在の北上市立黒沢尻西小学校。以下、黒小と略記）へ赴任。1936（昭和11）年12月に本書を文園社から出版。

高橋は、新任早々黒小の校歌を作詞し³⁾、また岩手師範学校附属小での教生実習で既に頭角を顕していた。彼の教生時の授業について、同期生の田中信は、「ただひとり訓導以上」の授業をし、綴方教育こそが教師の仕事ということを感化してくれたのは高橋であり、彼は卒業後直ぐ県主催の綴方協議会で郡代表として発表し先輩大家連を顔色なからしめた、と記している⁴⁾。

しかし、彼のこの発表を理解した者はほとんどいなかったらしい⁵⁾。それは、高橋の指導法が、当時から見ると進み過ぎていたためではないか。これは、教生時、新任時に——つまり、先の「宣言」と同時点で、既に「人生科としての綴方」が構想されていたことを意味する（重なりⅠ）。この点、本書出版を企画した小砂丘が、「僕は今、ゆくりなくも昭和四五年の頃、『綴方読本』『綴方生活』にあって、生涯この道に打込もうとの決意を固めつつあった時（中略）岩手の友から『高橋という男がすばらしい綴方指導をしている。その記録を出版してみぬか』という意味の手紙を貰ったことを思い出した。（中略）この申し出は未だ僕の心を動かすに至らず」という記述が参考になる。これこそ、小砂丘自身が求め続けていた生活綴方実践であろう。小砂丘が言う「当時の世相、綴方界の動相を今にして思えば、その雑音騒裡に毅然として綴方を守り育てていた君の業績は敬服に値する。」実践であったのである（重なりⅡ）⁶⁾。

ところで、彼が赴任した黒小とは、一体どんな学校であったか。黒小は、南部藩の城下町黒沢尻に、

「学制」発布の1872（明治5）年8月に発足した名門校。彼の赴任時は、県下一の自由教育校として名高かった。小笠原正一校長の下、主席の小原隆三、柏崎栄、吉田農等の「30歳未満の駿馬のような青年教師達が、郷土教育や労作教育を目指して特色ある学校経営を実践し、教育者としての生きがいと冥利を感じながら教育的情熱を燃焼させていた。」そこへ高橋は赴任し、早速綴方教育を実践していった（この「駿馬」の中には高橋も入る—引用者）。1933年—高橋は、大病により31年に二子校に転任—には、校長が主導する男女共学制、自然観察学習、報奨制度の廃止、文集づくりによる綴方教育に神経を尖らせていた県当局が、新興教育の提唱者山下徳治を囲む研究会開催や『和賀新聞』の「柏崎栄の綴方教育は文部省方針逸脱」という報道を盾に黒小教育の弾圧に入る。県下全視学を動員して教育視察をし、児童に試験（例：ソビエト・ロシアはどんな国か、どう思うか。金持ちと貧乏人の出来るのは何故か等）をして自由教育は不適當と断定。小笠原校長を僻地校に左遷、代わりに佐藤賢次県教育課長が着任。が、黒小の教師達は「佐藤校長と方針・方法論すべてにわたって激しく対立し、この騒動は町民も巻き込んだ対立論争に発展」。この騒動の中で、柏崎等有力教員は強制的に僻地へ転勤させられる⁷⁾。

2. 『人生科としての綴方経営の展開』の基本スタンス

『人生科としての綴方経営の展開』に移ろう。小砂丘が、高橋の実践を何らかの形で思い出し出版しようと決意したのは、1936年の夏と推定される。根拠は、小砂丘主宰の『綴方生活』に、高橋の「私の歩んで来た綴方の道」を同年の8月号に載せ、その続きを10月、11月号に連載させていることにある。この時既に、この連載をまとめて本書の第二部とする小砂丘の構想は固まっていたに違いない。その後、小砂丘は、本書を文園社から出版する段取りをし、その序を東京高等師範学校附属小主事佐々木秀一（序の日付は同年12月15日）に依頼している。

高橋は、『綴方生活』と同様、本書第二部のこの「私が歩んで来た綴方の道」に「行路を同じうする人々に」というサブタイトルをつけている。本文は、「健

康で身を打ち込んだ教育生活は、昭和三年から五年（1927-30年）の中ごろまでであった。一力強い人生の建設—それは私の綴方への願いであった。私は道がわからないで唯苦悶していた。—これは当時の偽らない記録である。」というリードで始まる（同書352頁）。本書は、正に、先の「宣言」時になされた岩手県に於ける「若き教育家」の貴重な生活綴方記録である（重なりⅢ）。

高橋は、既にこの時点で「宣言」にびったり重なる綴方を子どもに書かせていた。しかしなぜ、直ぐに公表しなかったのか。彼は、これらが直ぐに中央の雑誌に掲載されると、指導している子どもがそれを模範文と思い、本当の意味で自己の生活を直視した綴方を書かなくなり、彼が目指す綴方教育ができなくなると考え、彼等が大人になるまで掲載しない、と約束していたらしい⁸⁾。これが事実なら、なぜ彼がこの綴方を直ぐに発表しなかったか、という謎も解ける。

本書の分析に入ろう。黒小に赴任し、高等科の担任になった彼は、最初の綴方の時間に「好きな題でよろしい。書きなさい。」と言い、綴方を書かせる。だが、「原稿用紙一枚と書かれたものはほとんどない。半分、あるいは四分の三枚、甚だしきは四分の一枚ぐらいのものもあった」という状況。その時、彼は、「世は如何に綴方を唱え、教育は如何にありとも、生命も、個性も、自我も、文化も、文芸も、すべて彼等とは縁なきものであった」という現実を知る。「自由選題は児童の生活開放をもって叫ばれ、個性指導であるの、生命深化であるのと、色々論じられても、此処だけは別世界。／どこに生活に即した叫びがあり、要求があり、詠嘆があるのか。」と仲間教師に訴えた。この嘆きは、もうそのまま先の「宣言」と同じスタンス（重なりⅣ）。返ってきた答えは、「何、高等科は中学校にえらび抜かれた残りものだ」であった。彼とて、高等科の子どもが、「優秀なものは殆ど土地の中学校にえらび抜かれた至極無気力な存在」であることはもちろん承知。が、仲間教師の「至極樂觀的なこの言葉」には納得がいかない（353-355頁参照）。ここから彼の生活綴方実践が始まる。

彼の基本スタンスは、「私の求めて居る綴方は生活精進の綴方である。一步でも、半歩でも生活の深

まっていく綴方、生活の力強くなっていく綴方である。」原稿用紙一枚も書けない「称揚するに足らない作品を前にして」彼が決意した事は、次の事である。

そうだ！ 語ろう。先ず彼等の生活にとけこんで、彼らと共に生活する為に語ろう。／この境地を切り抜けるには、一行や二行の評語などではどうにもならない。そんな形式的な評語は誰でもよい。それよりも彼等の一人一人と語って行くのが一番いゝ。／彼等の綴方を動機として、彼等と共に人生を語ることより外に、この境地をどうともする方法はない。性急に彼等がいい文を求める前に、彼等をして表現せずには止まらない衝動を固めていくより他に方法はない。／一週一回の綴方の時間の一斉指導は主として鑑賞、即ち人生と表現とを語ることにあてる。先ず彼等の自らを信ずる力をたかめ、そして生活意欲を燃やしてやらねばならない。／私は、そう考えると同時に、彼等の前に裸体になる用意をした（338-339頁）。

綴方を書けといわれるから書くだけ、書かれた文は「生活も概念、表現も概念」。この現状に対して、彼は、「『先ず概念より実感へ』彼等を裸体にして直接的な叫びを叫ばしむことだ。語ってもどうにもならないことを語るよりも、唯一言でもよい、語りたいことを語らせることだ。」（359頁）という強い決意で立ち向かう（重なりⅤ—これは「概念ください」の萌芽と言える）。

彼は、「それ（＝語らせること）は実感へ着かしむるの唯一の道程。ここから彼等の生活の展開をはからねばならない。先ず語りたい自己を凝視させること。／従って表現は出来るだけ安易な気持ちで云わんと欲することを十分相手に理解して貰う様に伝えることを目的として書かしめなければならない。／云いかえて見れば、先ず自分の本当に語り甲斐のあるもの、語りたいものを語れ、而かもそれを十分わかってもらえる様に表現せよ」（360頁）と記している（重なりⅥ）。

だが、思うように綴方の質は向上しない。こうした低迷状況が続くと、「力を傾けて報いられることの少ない時、わたしは彼等をせめようとしなかった

か、時々自らの至らなさを、頭脳の程度が低い、長い間放任されて居たなどという理由のもとに、彼等の側に転嫁して自己慰安をしようとした。」しかし「それは正しいことではない。成績不振の理由は彼等の側にあるのではなくして、むしろ自分の側にあるのではないか。子供達の作品の空虚さを責める前に、自分自身の指導の妥当であるか否かを吟味する必要はないだろうか。」(①)と反省する(366頁)。

「自分は今こうして日頃子供達の前に立って真実を説いて居る。が、一体真実の姿と云うものは何か。自分の指導は一体どこに行くのか。彼等の現実を急に否定し去って、而して次への建設に果たして何を示して居るであろうか。建設を持たない否定、それはみだりに混迷を与えるに過ぎないものではないか。」(②)と自省する(同頁)。

この①②から、「(子どもの)文章学的綴方にあき足らず、もっと生活することと関係の深い綴方を求めてきた。しかし生活することとは何であろうか。至って漠然たるものではないか。/所詮自分の仕事に力強さが無いのは体系がないからだ。文章についても生活についても発展的な体系を持たなければ」と省察・煩悶し、「及ぶ限りの雑誌、文章作法、細目、指導書等を夢中になって」あさっていく。そうして、指導体系を二つに分けるという結論に至る。つまり「一つは生活指導体系であり他の一つは表現指導体系」(367頁)である。そうして、文章を書くよりも先ず子どもと共に生活するために、教師も裸になって本音を語り合う、そこから自分が語らずに(=書かずに)おれない「語りたい(=書きたい)」という欲求を一人ひとりに生じさせることに専念していく(重なりⅦ)。こうして彼の頭の中では、綴方の指導法が一応整理されていく。が、実際の指導は、そうスムーズに進展しない。彼は何度も立ち止まり、省察を繰り返す。そして、やがて、この指導体系とも「訣別」せざるを得ない事態に直面する。それはどこか。

たとえば彼が得意とする綴方の「文話」の時間に、1美観、2現実……と大項を決め、それをさらにイ、美は近くにあり、ロ、光・色・強弱の美……という小項目に分け、この小項目を一時間の授業内容に割り当てていく。そうすると子どもの作品活動も活発になる。だが、出された作品は、

仔細に観察すれば小気の利いた最もらしい模倣でしかない。/美観も、正義感も、神秘感も何も彼もいい。しかしそれらの説き方は余にもお上品。彼等の生活と密着しないこれらが、彼等の最もらしい模倣として現れるのは何の不思議もないことだ。/彼等の生活に即いた綴方は決してかゝる寄せ集めの借り物から得られるものではない。/幾ら多方面に美感を説いても、結局は百貨店的に彼等の頭に切れ切れの知識を詰込むことになる。(ということに気づき)つきつめるものをつきつめて行けばよい。子供の心に真実にふれて、育てて行くものに突当らなければならない。彼等には彼等の生活がある。それに触れること。もぐり込め、正義も、美も、愛もどうでもよい。彼等の生活の野生を開拓していくもの、建設していくものでなければならない(371頁)。

こうして彼は、「子供達と共に真実に生活していく過程」に、「再び彼等と人生を語るの生活に立返って行った」(同頁)。ここで彼が想定する「生活」は、「田舎」のそれ。しかしその「田舎」は、「単に生活の自然環境としての田舎や地方ではない。(中略)彼等に歴史的存在としての田舎であり、地方であり、現実的生活関係に於ける田舎であり、地方であった。」「即ち私の考えたものは田舎、地方の歴史的现实関係に処する生活人としての一つの性格であり、型であった」(375頁)。ここから、子どもを「田舎、地方の歴史的现实関係に処する生活人」として観る彼の生活綴方的子ども観を引き出すことができる(重なりⅧ)。

ところが、眼前の子ども達は、「綴方の中で余りに簡単に親孝行をし、余りに安易に懺悔をして居た。『お使いに行って来い』と云いつけられる。寒いから行きたくない。叱られる。いやいやながら行って来る。親の云う事を聞いての親孝行」(376頁)。でも現実には、「もっと複雑で多面的であるべきだと思う」その点を子どもに突き詰めさせ、そのまま本音を表現させるべきだ、という結論に達する(これは、「生活台」「概念ぐだき」に通底する「北方性」のメルクマールである。以下メ i 等と記す)。彼は言う。

綴方は一部繊細な過敏な神経をもった子供達の占有物であってはならない。「環境に芽ぐむ生活力」それをもり立て、育てて行くことこそ綴方の大きな任務でなければならない。／しからは如何にしてその環境の具体性にふれてそれを育むかである。それは子供自身の生活に即する自らなる叫びを叫ばしむことより外にないのである。／生活をもって生活にぶつかれ。／私はこのモットーのもとに子供達の生活にぐんぐんと肉薄して行った（376-377頁）。

こうして、彼はいよいよ「宣言」に近づいていく（重なりⅨ）。彼の呼びかけに応じたものも徐々に現れてきた。彼は、「うららかな気持ち」「いゝ気にさえなりかけて居た。」しかし、この「いゝ気」になりかけて居た気持ちを微塵にたたきつけ、反省させ、考え直させ、否が応でもひきあげずにおかない時が来た。——それが本書第一部最初の平井俊子の「淋しい家」という綴方。その内容は、およそ次のようなものである。

六年ぐらい前までは、家族六人で裕福な暮らしだったが、父は事業に失敗し家出、今は、母と二人で借金取りに追われる毎日。親戚の小さい子供からも、貧乏人と侮辱される。兄は家計を助けるために北海道へ出稼。母はその兄を心配して終に狂人に。平井は、そんな母と二人住まい。毎日気が狂った母の躁言を聞かされる。兄を心配して「やらねばよかった……もし、ひどい家さ行くななんて云ったらうな連れて来るてが、やれやれなんて」と母は私にみんな罪をかぶせる。「すかねえや、おら行くんだなんて云はねえんちや、自分も行きだが行けばいいなんて云っていながら……」と半分泣きたい様な、半分くやしい様な口ぶりでこう云ってしまった。「こうして苦しい家に生まれた私は、ある時は苦しみ、ある時は淋しくなぐさめ合い、ある時は、一人淋しく泣きくらして来た。それに付けても、兄の身は、心は、この父母兄妹五人そろって楽しく語る日は何時……。」（2-16頁参照）

この綴方を手にした時の気持ちを、高橋は次のように記している。

単なる皮相な感覚感情、人間性の概念、そんなものの表現にあきたらず、現実の生活に即し真実に内容あり力強く生活の地についた叫びを求めて来たのであった。私は今はじめてそれが報いられて来た様に思った。／これこそ全いつ的な人生の表現ではないか。親孝行などと白々しく云うべくあまりに痛ましい親子の関係ではないか。読み終わった私は徹宵万感去来の為に興奮して居た。／私は恥ずかしかった。私の綴方観、真実に対する認識度、それらは皆浅薄なものであった。私はたじろいだ。私は私の綴方観の急速度に転換して行くのを感じた。／言葉の問題、それらは最早や重大な問題となすに足りなかった。地方性、それもそれ程重大な問題として考えなくてもよくなって来た。地方的な綴方も、科学的な綴方もすべて一面的なものに過ぎないではないか。問題をふくむ生活の真に肉薄する時、それは二次的な問題であるに過ぎなくなるのではないか。／綴方は全人の教育でなければならない。綴方は人間の教育でなければならない。使い慣れた言葉でありながら、人間への教育という言葉が、新しい光を、興奮した私の頭脳の中に明るく点ずるのであった（378頁）。

この「綴方は全人教育でなければならない。綴方は人間の教育でなければならない。」という言葉は、もう「宣言」そのものである（重なりⅩ）。

3. 暗さの中に光を

生活綴方は「暗い」ということは当時から言われていた。とりわけ「北方性」のそれは、暗いと言われていた。では、なぜそんなに暗い生活綴方に彼等北方の綴方教師は没頭していったか。この問題は、さらに総合的に研究していく必要があるが、本稿では高橋に絞って検討しておく。高橋の場合、子供達が生活している歴史的現実に向き合っていくことは、本当は暗くなかったのではないか。いや、客観的には

暗いかもしれないが、そこを批判的に吟味することでかすかな光を、自分達で生活を切り拓いていくという「生活力」を子供達に育もうとしたのではないか①。それともう一つ、彼の場合、慕う石川啄木が常に頭のどこかにあったのではないか②。

まず、①の点：

「彼等の人生の前に自己自身の無力を思うとき私はこの上もなく辛かった。それは生活の現実的な叫びとして、どやどやと目の前に積み重ねられた子供達の暗黒面であった。」と悩み、高橋が助けを求めたのは、1928（昭和3）年に『綴方教育』誌に発表された木村文助の「綴方二十年」と小原義正の記録「ある児童の創作を中心にして」と富原義徳の『土の綴方』（厚生閣）であった。彼は、木村、富原兩人に以下のような不満を持つ。

- A. 木村の実践は、暗黒や苦悩の中に人生を、自己を直視する、それは確かに厳粛なこと。しかしその直視の中に人生の建て直しを期待する氏の指導は余りに虚無、／私はこの木村氏の教育者としての正しい情熱と誠実とに打たれながらも、どこかしら心を満たしてくれないものがあった（下線—引用者）。
- B. 富原『土の綴方』は、——暗さがあっても止むを得ない。そうしか流れ得ない水脈だ。暗黒に徹してはじめて光明へのあこがれがある。——に象徴されるように宿命論、現実肯定論。暗黒に徹した光明へのあこがれを具体作品の中に求めた。しかしそれは余りに牧歌的なものでしかなかった（下線—引用者）。

彼が納得したのは、小原の記録。それは、高等二年の一児童の一年間の詩作の跡を叙したもの。彼は、「これらの詩作の中に一個の人間の人生に向かう態度を見る。何かしら物足らなかった私の苦悩のあとをふり返ってその解決に強い示唆を受ける。」（381-394 頁参照）そうして、高橋は、暗さに対して、次のように考えるようになる。

暗さは結局生活の暗さにある。だから私達はこの暗さをただ書かしただけではだめだ。そこには唯暗さの上に暗さを重ねる、悲惨な暗さの

展覧会の出現を見るだけだ。／私達の教育はこの暗さからの自己解放にある。暗さに直面し、そこから自己を教育して正しい人格を築くこと。しかし如何にそれを建設して行くべきか。暗さに徹してこそ明るさも望まれると云う。一応尤な理屈だ。しかし如何にすればそれに徹するか。／自己解放、それは暗い生活の単なる凝視ではなく、その上に打建てられる希望こそその自己解放としての意義をもつ。／暗いも、明るいも、それは偽りの無い存在。私達のこの暗さよりの自己解放は、この暗い意識の彼方に、力強い生活を建設せんとする意思の人生観をこそ展開しなければならない（395 頁参照）。

先の「淋しい家」に出会って途方にくれた彼は、その「あとがき」を次のように記す。

彼女の苦悩の根源は、明らかに貧困にある。この根源を除き去ることができれば、彼女の苦悩の大部分が救われるだろう。然しそれは一教師の教育交渉の如何ともなし得るものではない。／かゝる現実に対して教育は全く無力。しかし無力なるが故に何もなす所がないであろうか。／微力ではあるが、一教師として為すべきものはあるはずだ。それは何か。彼女の生活意力に呼びかけその意力を積極的にたかめ、苦悩の中に力強く生活開拓に邁進さすべく、一伴侶たることである。／私は幾分でも彼女の力となり、生活を励まして生き通させなければならないと思った（19 頁）。

これはもう、「宣言」が求めていた綴方教師そのものである（重なり XI）。

もう一つ、安部静夫の「豚飼い」を挙げておく。阿部は、家が没落し商業学校を中退してこの高等科に移ってきた。今は豚を飼い、自分の授業料を稼ぎ、母の手助けをしている。紙がないからと、障子の張替えしたあとの古紙に書いた「豚飼い」では、父の死後、豚飼いを始め、自分で修繕したぶつかれ（壊れた）車で、豚のえさをもらい集めている 11 月 25 日の午後、巡査に出くわす。夏服を着て壊れた車を押していた彼は、巡査に「何だ、こんなきたい車押

して……」と咎められるが、何も言い返せない。彼は、最後を次のように締めくくっている。

たった一つの苦心の車はもうひけない。十五年間——今迄随分色々と僕の生活はかわった。しかしまさか豚のごみをのせる車が悪い故に巡査に叱られるとは思わなかった。……/ 運命か、そんなことに支配されてはならない。車は使わなくともよい。自分の力でやろう。開くによい運命は、自分の力で開いてすゝもう。

これに対して、高橋は、「彼の生活意欲は堅実に展開されている。そしてすべての障害を乗り越えて脈々と続く。/ 生活精進とは何であるか……それは、あくまでも自らを励まし、鞭うちながら生き抜こうとする生きの努力ではないか。」と解釈している（346頁）。

このように彼は、「綴方は或意味で生活することそのことでなければならない。/ 生活して行くことは、或意味で、人生の現実中止揚的裁断を与えることであり、裁断は又或意味で解釈する事ともいわれよう。従って綴方することは、人生、社会に対する一つの解釈的把握を意味するものでなければならない。」（275頁）もう、ここに暗さはない。暗い面を宿命論と捉える卑屈さもない。ここに、彼が目指した人生科としての綴方教育のエートスがある。これは正に、「宣言」の真髓とぴったり重なる（重なり XII）。二子校に移り大病が癒えた高橋は、1932年の『綴方生活』に載せた「現代綴方の問題」で、当時問題にされていた実用主義の綴方に対して、「実用とは実際の用に立つということで、単なる享楽や、装飾でない所の価値をもたねばならぬ。且つ明瞭な目的的活動であり、計画的活動であることを必要とする。実用の綴方は、生活プロジェクトの綴方である。」と言う⁹⁾。この寄稿から、小砂丘との繋がりが少なくともこの時点であり、先述の大人になるまで彼等の綴方を公表しないという約束があったことも傍証される。

②啄木との関係：

彼は没25周年の啄木展で、啄木が洪民小学校で指導した綴方帖を見るが触れることが禁止されていたため、啄木の教え子の一戸完十郎から借用して、

それを検討する。その結果に基づいて啄木の綴方指導を中心に「啄木と綴方教育」と題する14頁にわたる論考が『綴方教育』（第九巻、12月号、1937年）に掲載されている。彼は、この頃から啄木の追悼会等に頻繁に顔を出す。この頃から、啄木の教え子に本格的な聞き取り調査も開始する¹⁰⁾。

啄木に関して面白いのは、1929（昭和4）年に、洪民小卒の白沢菊治が啄木の一号歌碑を掃除していたら、「赤」の歌碑を掃除するとは何事かと巡査に咎められる¹¹⁾。が、この頃から啄木の名誉は復活され、県教育課編の『郷土読本』に金田一京助の「啄木の碑」が掲載され¹²⁾、その後、映画も製作される。1940年の啄木文化映画製作の際に、富士スタジオの高木企画部長は「嘗て東北は左翼思想の材料となったが、今や東北は文化映画人が捜し求めるものの目標となっている」と褒め上げている¹³⁾。ちなみに、この40年の暮れに、黒小での元同僚柏崎栄は、例の「綴方事件」で検挙される。

高橋にも検挙歴がある。彼は1930年11月に、「日本教育労働者組合準備会」につながる岩手県のリーダー織田秀雄宛の手紙があったという廉で逮捕される。高橋は預かっていた『新興教育』をなぜ所持しているかと厳しく詰問される。が、病気だと言いつけていた黒小の教え子から「早く良くなってください」という見舞いの手紙が留置所に寄せられると「貴様、子どもからは慈父のように慕われておるんだなあ」と刑事も珍しくしんみりとなることもあったそうだ。彼は、真冬の一ヶ月留置所暮らしを余儀なくされ、ここで身体をこわし、釈放直後、結核に罹る。この時吉田農も検挙される¹⁴⁾。彼が、啄木を慕ったのは、盛岡一中の同窓の外に、「手足が真黒でも、来る度半風子（しらみ）を落としていっても、彼等はみな我が弟である。」「学科のできないたちのおじけた貧乏人の子供の方が、一層教育する必要がある、小学教師は貧乏人の子供に却って一層力を入れて貰いたい¹⁵⁾」と願った啄木のスタンス、つまり、子どもの生活の位置まで降りていった村の教師としての啄木ではないか。そしてあの極貧の中で、「故郷の村のはずれに、西洋風の家を建て、丸善よりの新刊の本の頁を切りながら、村の子供を集めては、いろいろの話を聞かす」ような「理想の家」がイメージできる生来の楽天性、教育へのロマンではなかつ

たか¹⁶⁾。

高橋自身、当時は「貧困と弾圧の時代で欠食児童は珍しくなく、銭湯にも行けない子さえあった。何人かの教師が身銭を切って、そうした子を銭湯に連れて行って背中に層をなした垢を流してやったものだ」と述懐している¹⁷⁾。これは、もうそのまま啄木の「手足が真っ黒でも……みな我が弟」の世界である（メ ii）。

鈴木道太は、秋田の小学校五年生の「汽笛」と題する綴方「あの汽笛／田圃に／聞こえただろう／もう／あば（母）がかえるよ／八重蔵泣くなよ」が読めるか、ここから「生活の深い陰影のなかで取上げた、愛憐の迫力であり意欲のロマンチズム」が読み取れるか¹⁸⁾。そしてまた、啄木の詩「この次の休日に一日寝てみると／思いすごしぬ／三年このかた」が読み取れるか否かが、「北方性」の綴方で鍛えられた子どもか否かの境目になると記している¹⁹⁾。高橋に鍛えられた子どもは、これらの詩の世界を正に生活しており、その生活を綴っている。これはもうそのまま「北方性」そのものではないか（メ iii）。

4. 出版の反響

『人生科としての綴方経営の展開』の出版は、綴方教育界にいかなる影響を与えたか。筆者が手にした本書は1937（昭和12）年2月20日の第二版。初版が前年の12月20日。2ヶ月で再版ということから、本書が如何に反響を呼んだかその一端が窺えよう。また、『岩手教育』の1937年3月号には多賀公会堂における盛大な新著出版祝賀会の写真も掲載されており、地元での反響が窺える。読後感的論考としては、『綴方教育』の1937（昭和12）年1月号に5本、『岩手教育』の37年2月号に7本、3月号に6本、5月号で、1本の計14本。さらに、戦後になっても、1975年に「高橋六介著『人生科としての綴方経営』を思う」と題する論考がある²⁰⁾。岩手県には相当のインパクトを与えたと推測される。が、ここでは、石橋勝治と及川均にだけ言及しておく。

戦後直ぐに復活した北方性綴方教師石橋勝治（当時は花城小）は、前置きで、1931（昭和6）年の頃、綴方協議会が仁王小学校に開かれたことがあったが、高橋氏はその頃熱弁を振られたことを記憶して

いるとし、以下のように記している。

高橋氏が活躍した時代には、まだ一般に現在の如く指導が現実についた生活教育の実践傾向を示していなかったように思われたが、氏は、既に当時に於いては作品への指導語の徹低ぶりや、その指導の親切丁寧であることを思えば、如何に子供生活観の養成教育に努め、子供の生活精神をして、現実の生活を克服し切らないではいられぬようにして、児童生活を組織して行ったかがうかがわれる。（中略）リアルな文、能動的な文、苦悩の文、何れも現在（1937年—引用者）の綴方界を思わせぬものはない。働くことの生活指導等皆然りだ²¹⁾。

石橋は、当時既に「何れも現在の綴方界を思わせぬものはない」と評価していることから、高橋がこの分野で魁であった、しかも、「北方性」とも重なっていたと整理（メ iv）できる。

及川均は高橋の実践は、「これは、全日本の嵐と波濤の時代に、岩手県の若い一人の教師によって闘い守り育てられた生活記録だ。そしていささか政治的なもの言いするなら、これは教師である限り人が、また如何にわれら生くべきかを問題にする人すべてが、必ず一たびは読まざるべからざる書」と評価している。と同時に、1937年現在から見てその弱点をも鋭く指摘している。それは次の5点である。

1. 高橋の実践は、自由選題・文芸主義の時代。この時代に、生活綴方を実践していたが、実践に伴う苦悩をなぜ自分一人に閉じ込めたか、一人も共鳴する人はいなかったのか、その努力を十分に仕切ったのか。
2. 綴る事がそのままに生活認識となるような、その認識に導かれた態度の成長になるような、そんな綴方をもっとしてほしかった。
3. 子供の現実を見て、表現の技術が何であろう、と言う。正しくささたる技術ではあろう。けれどもささたらざる技術は生活を技術する。生活認識のしかたを教え、生活態度を鍛える。表現のささたる技術だと言って生活認識の仕方を鍛えることが弱められている。

4. 「私の真剣に歩んだ道は、何ものも結論したものではない」「それは子供達と共に、ほんのわずかな人生の片鱗にふれたに過ぎない」と言うが、「ほんのわずかな」の人生であっても、それは「立派な厳とした人生、歴史であり、そして私達は見事なものではないにしても一つの解決を持ち結論を持ちつつ生きていくのではないか。」そう生きねばなるまい。
5. 綴方では、深い個人の生活が掘り下げられていても、身近かな希望が湧き、どんな恐ろしい劇しい虚無をも叩き落す事が出来る生活の科学にまではなっていない。私があなたの実践を生活綴方への過度期の指標としたのは、こうした（たとえば「寂しい家」をどう学級に持ち込んだか、それによって学級の仲間はどの態度することを学んでいったか—引用者）子供の組織化をはっきり指示していない。生活綴方の実践は、作品した子供ばかりではなしに、その作品を契機として学級の子供らを組織することを明瞭に意図する（ここから新たな実践形態の科学が産れてくる。）作品することで生活現実を科学する、新たな共同意識の昂揚——これが今要求されなければならない生活綴方の課題だ。

指摘5は、北方性綴方教育のメルクマール（その象徴的スローガンが「ひとりの喜びがみんなのよろこびとなり、ひとりの悲しみがみんなの悲しみとなる教室」）を確定していく上で特に重要、と筆者は考えている。この点で、北方性綴方教師及川による「高橋の実践は生活綴方教育への過度期」という位置づけは、貴重である。そして、一つの綴方を学級の全員で語り合う「集団思考の組織化→自治」が北方性の主要な要因（メv）であることも明らかになった。

まとめ

以上、[重なり I-XII]、[メ i-v] から、①に関しては、青年教師高橋六介の綴方実践には、北方性生活綴方的教育方法の萌芽が含まれていた。しかもそれは1927-30（昭和3-5）年と北方性綴方運動が本格化するよりも前の時期である。したがって、高橋は北方性生活綴方的教育の魁であった、とまとめるこ

とが出来よう。②に関しては、暫定的に、北方性生活綴方的教育方法を規定するメルクマールとしては「生活台」、「概念くだし」、「集団思考→自治」を抽出することが出来る、と言うことが許されよう。もちろん、これらのメルクマールについては、岩手県に於いて1934・5年頃から盛んになる及川均、石橋勝治等本格的な北方性綴方教育との比較を介して、さらには鈴木道太等宮城県国語教育連盟との関わりや秋田県の成田忠久、滑川道夫、佐々木昂、加藤周四郎等北方教育社や国分一太郎や村山俊太郎等をも視野に入れて面としての「北方性」の内実を探索していくことが、今後の課題として残る。

[本研究は、平成21年度特別研究費（課題番号211L20A）を受けて行った研究成果の一部である。]

注

- 1) 岩手県小学校・中学校長会編『岩手県教育界—岩手の校長会年史—』、1974（昭和49）年、26頁。また黒沢尻町学校教育百年記念祭実行委員会編『黒沢尻教育百年誌』（昭和48年、93頁）も同様の捉え方。つまり「黒小において高橋六介先生は、それ（北方教育運動—引用者）に先がけて、あるいはそうした潮流とは独立した立場で、独自の綴方教育をおし進めていったのである。」
- 2) 『綴方生活』第二巻、10月号、1930年、表紙裏。ここには、小砂丘の他に、野村芳兵衛、峰地光重、上田正三郎等が名を連ねている。尚、『綴方生活』創刊号（1929年10月）の「宣言」は、「綴方教育、さらには現代教育の全分野に満足できなくて」という立場だが、第二次「宣言」ではこの方向性がより明確に綴方教育に軸足を据えてなされている。
- 3) 『黒沢尻教育百年史』、93頁。
- 4) 『綴方生活』第九巻、1月号、1937（昭和12）年、45-46頁。
- 5) 盛岡高等農林教授高橋康文は、その時の模様を「昭和三四年頃の県下綴方協議会でなした彼の発表は、たゞ僅かの理解ある人を除いた大部分の人達によって否定され、葬り去られた」と回顧している（同上、42頁）。
- 6) 同上、41頁。
- 7) いわゆる「黒沢尻小学校事件」。『黒沢尻教育百年誌』、83-103頁参照。この「事件」は、『岩手日報』が1933（昭和8）年7月23日から27日まで連日報道している。だが、『百年誌』は、「この激動する時代黒沢尻小学校は、校史百年の中でもっとも生彩に富む教育実践

を行い、当時はもとより今日に至るまで、教育を考える上で重要ないくつかの問題を提供した」と総括している。

- 8) 田中義郎他『もうひとつの昭和史』勁草書房、1977年、105頁。
- 9) 『綴方生活』第四巻、10月号、1932（昭和7）年、46頁。
- 10) 『岩手日報』の1936（昭和11）年4月14日版に前日の洪民村と盛岡で行われた追悼会、1940（昭和15）年10月16日の夕刊に10月13日の座談会に高橋も出席と記されている。尚、上田庄三郎の『青年教師 啄木』（三一新書、1955年）の「国語綴方帖」（189-204頁）は、高橋のこの聞き取り調査ノートから借りたと明記されている。
- 11) 白沢菊治「不思議な啄木との縁」『私の昭和史』4、岩手放送刊、1984年、3頁。
- 12) 『郷土読本』下巻（1930年）の「啄木の碑」には、「（前略）幼くして神童の誉れを馳せ十代で天才詩人の名を博した君が（中略）一家扶養の重荷を負うて生活の路頭にさらされたその半生は、余りにも痛ましい追憶。（中略）病床遥かに嘗て我を捨てた故郷の人に、尽きざる哀憐の涙を注いだ。（中略）奮起したのは洪民村の人びと。（中略）昔詩人が教えた教え子が碑の建て

られる丘の地主、山の石の持ち主もみな当年の教え子。（中略）『（石川）はじめさんの石を曳き出すのだ』と、三日の間夜を冒して六百人の手で曳きだした。」とある（136-141頁参照）。

- 13) 『岩手日報』1940年10月16日付夕刊。
- 14) 前掲『もうひとつの昭和史』112頁。
- 15) 「林中日記」、『石川啄木全集』第四巻、筑摩書房、1978年、357頁、「家庭より小学教師に望む事共」『同全集』第八巻、450-451頁。
- 16) 後者は、筆者が2009年9月2日に啄木記念館を訪れ、全体的に渋い雰囲気の中で一見場違いな感がする「啄木理想の“家”」の明るい展示物を見ての率直な感想である。尚、「呼子と口笛」『同全集』第二巻、420頁参照。
- 17) 前掲『百年誌』、94頁。
- 18) 鈴木道太「綴り方に於ける北方性の問題」『綴方生活』第七巻、3月号、1935年、90頁。
- 19) 鈴木道太「北方に於ける国語実践の解釈学的方法」『綴方生活』第七巻、7月号、1935年、17頁。
- 20) 高橋忠司「高橋六介著『人生科としての綴方経営の展開』を思う」『共存共栄』第14号、北上・共存共栄社、1975年、81-84頁参照。
- 21) 『岩手教育』1937年2月号、76-77頁。

受付日 2009年9月30日

受理日 2009年11月19日

Abstract

Mr. Rokusuke Takahashi practiced his “Seikatu-Tsuzurikata” education at Kurosawajiri Higher Elementary School in Iwate Prefecture, the place of his first assignment as a new teacher, from 1927 to 1930. It was exactly at the same time as the period when the “Tsuzurikata-Seikatu” magazine was first published by Tadayoshi Sasaoka and his partisans, and was 34-35 years earlier than the period when the Northern-Style Education movement became disseminated widely in general public. Although his practice in those years did not necessarily have full characteristics of “Northern Style”, we could verify that it was certainly a groundbreaking practice of Northern-Style Pedagogy of “Seikatu-Tsuzurikata” in Iwate Prefecture.

[Keywords] Seikatsu-Tsuzurikata “Northern-Style” Rokusuke Takahashi Iwate Prefecture